

原爆表象とジェンダー

加 納 実紀代

＊はじめに

1945年7月16日午前5時29分45秒、アメリカ、ニューメキシコ州トリニティサイトで、人類史上初めて核兵器が誕生した。豪雨があがったばかりの大地を揺るがす巨大な火球に、開発を指揮したオッペンハイマーは、『バガバッドギター』の一節「我は死なり、世界の破壊者なり」を思い起こしたと後に語っている。その「世界の破壊者」は、3週間後の8月6日、広島市上空600メートルで炸裂し、まさにおびただしい死をもたらした。さらにその3日後の8月9日に長崎にも投下され、投下後1週間に合わせて約10万人、45年末までに20万余の死者を出している。ようやく生き延びた人々も白血病やガンといった後障害に倒れ、あるいはその恐怖におびえながら生きねばならなかった。まさに原爆は、量的にも質的にも究極の戦争被害といえる。

そうした悲惨な核被害にもかかわらず、その後日本の海岸には54基もの原発が建てられた。そして2011年3月11日、その一つ、福島第1原発に激甚な事故が起こった。大地も海も汚染され、人々は厳しい避難生活を余儀なくされている。なぜ被爆国日本が原発大国になったのか？ 事故後この疑問が国の内外でまきおこった。本稿ではメディアにおける原爆の表象をジェンダーの視点で分析することから、この問いについて考えてみたい。

対象は原爆投下直後から50年代までほぼ15年間の新聞、映画、マンガ、記念碑である。この時期の前半は占領下の報道統制により、原爆報道はないというのがこれまでの通説だった。しかし最近の研究により、膨大な原爆報道の存在が明らかになった。後半は原子力の平和利用、つまり原発導入が現実化していった時期であり、同時に、1954年3月、アメリカの水爆実験により日本のマグロ漁船が被曝したことから原水爆禁止運動が大きく盛り上がった時期でもある。原発導入と原水爆禁止運動は同時進行していたわけだが、何がそれを可能にしたのだろうか？ それを検討することは、なぜ被爆国日本が原発大国になったかを考えることでもあるだろう。

1. 占領下、報道統制と原爆のプラスイメージ

広島への原爆投下が日本の新聞で最初に報じられたのは投下2日後の8月8日。『新潟日報』では「新型爆弾使用 B29少数機広島を攻撃」と事実を伝えるとともに「残忍性露呈」とアメリカを非難している。『朝日新聞』も「敵の非人道、断固報復」（8月9日）、

「国際法規を無視せる 残虐の新型爆弾」(同11日)と、残虐性を強調している。降伏後も9月はじめまでは、廃墟になった広島の写真付きで原爆の威力を説明する記事がある。

敗戦国日本でSCAP(連合軍総司令部)の占領政策により、報道統制が開始されるのは9月中旬である。検閲の中心となったのは対敵諜報部(Counter Intelligence Section CIS)におかれた民間検閲支隊(Civil Censorship Detachment CCD)である。9月19日にはPress Cord(新聞紙法)が発令され、占領政策への批判とともに原爆報道はすべて禁止とされていた。しかし最近、早稲田大学20世紀メディア研究所の加藤哲郎らがプランゲ文庫のデータベースを検証した結果、検閲をクリアした報道が大量にでまわっていたことがわかった。例えば『朝日新聞』は1946年1月22日の社説で「原子力時代の形成」、47年9月10日社説で「原子力の平和的利用」を掲載、48年2月29日には「原子力に平和の用途」をのせ、原子力は爆弾以外にアイソトープなど平和的に利用できるすばらしいものだとしている。「原子力の平和利用」は敗戦直後からマスコミに登場していたのだ。

原爆のキノコ雲もアレンジされてメディアに登場している。ニューメキシコでの初の原爆実験成功からほぼ1年目の46年7月1日と25日、アメリカはビキニ環礁で原爆実験を行った。クロスロード作戦である。これについて『週刊子供マンガ新聞』46年8月4日号は、「フクちゃん」の横山隆一のキノコ雲のマンガ付きで「原子爆弾の試験が行われました」と報じている(図1)。「広島、長崎の二つの原子爆弾が投下されてから一年、いま、世界の人の目はこの実験にそそがれました。実験の結果はよさう通りひじょうに力をもっていました。十七の軍艦や船が、またたく間に沈没したり、大破したりしました。たくさんの実験用動物が死にました」。しかしマンガの下の文章には、実験動物にされた豚が1匹、27時間も海面を漂い、ついに助けられたとある。「ブタ君の海水浴はおもしろいですね」と、原爆の破壊力に対する子どもたちの想像力はユーモアの世界に誘導されている。

ちなみに、水着のビキニはこの原爆実験を受けて、フランスのデザイナー、レアルが



図1



図2

露出度の高い水着に名付けたものである。原爆はセクシャルなパワーに結びつけられたのだ。

48年の地方紙に載った風邪薬「ピカドン」の広告も、原爆の威力を借りたものである。そこには原爆のキノコ雲が描かれている（図2）。占領下、プレスコードにより原爆の惨状は報道できなかったが、威力あるもの、すごいものの象徴としてプラスイメージで使われていたということだ。

出版物においても同様だった。49年1月、永井隆の被爆体験記『長崎の鐘』が刊行された。これには妻の死や破壊の凄まじさが描かれているが、最後は「原子力の平和利用」賛歌である。「原子は爆弾のほかに使い道はないの？」という息子の質問に、父永井隆は「原子力は汽船も汽車も飛行機も走らすことが出来る。石炭も石油も電気もいなくなるし、大きな機械もいなくなり、人間はどれほど幸福になれるかしれないね」と答える。

「じゃあこれからなんでも原子でやるんだなあ」と息子は嘆声をあげるのだ。この本がプレスコードにもかかわらず刊行できたのは、マニラの日本軍による残虐行為の記録と抱き合わせだったためといわれているが、この原子力讃歌も預かって力あったのかもしれない。

映画でも科学技術や原子力のすばらしさはふりまかれた。占領下、アメリカ映画は日本の「民主化」のための手段とされた。「アメリカ映画は文化の泉」というわけだった。劇映画の輸入はC M P E（Central Motion Picture Exchange）によって行われ、46年中に38本のアメリカ映画が上映された。その最初は46年2月28日公開の「キュリー夫人」（図3）と「春の序曲」である。米 국무省OWI（戦時情報局）は「キュリー夫人」について、「人類にとって重要な発見であるラジウム発見の物語は、この映画の中で生き生きと描かれている。キュリー夫人のスピーチに含まれるメッセージは、戦後の世界をより良きものにするためのプランが用意されて、特に今の時期にかなっている」と推奨している。

ここにあるキュリー夫人のスピーチというのは、映画の最後で、マリー・キュリーがソルボンヌ大学の大講堂でおこなったものである。マリー・キュリーは2度もノーベル賞を受賞しながら、女性なるがゆえにフランスの科学アカデミーの会員になれなかったが、1923年12月26日、ラジウム発見25周年を期してソルボンヌ大学に招かれ、満場の男性学者を前にスピーチを行った。そこで彼女はいう。「だからこそ私は思うのです。科学は美しいものだ（Science has great beauty)」。これは非常に象徴的な言葉である。さらに「科学の精神は世界を悪への道から救うこともできます。（…）真実の光を求めよう。未知なる道を進もう。知識というたいまつ



図3

火を掲げ、古い固定観念に囚われず、光り輝く未来を築くのです」。

2. 原爆報道解禁——「原爆1号」から「原爆乙女」へ

日本の一般大衆が原爆の惨状を目にしたのは52年4月28日の独立後だった。SCAPによる報道統制は49年10月のCCD廃止により緩和され、50年より丸木位里・とし「原爆の図」の巡回展示が行われているが、目にする人は限られていた。それに対して、独立後初の原爆記念日を期して発売された『アサヒグラフ』8月6日号（図4）は無惨に焼けただけの被爆者を真正面からとらえ、衝撃を与えた。その反響は大きく、4回にわたって増刷して総計70万部に達した。同じ日付で『岩波写真文庫 広島』も刊行され、人々は初めて見る原爆の惨状に息をのんだ。

しかし原爆の威力には、熱線、爆風、放射能の3つがあり、さらに放射能被害には急性のものと同発性のケロイドや白血病、ガンといった後障害がある。『アサヒグラフ』や『岩波写真文庫』にとらえられた被爆者の惨状は爆発時の熱線、爆風、急性放射能障害による。その人々の多くはこの時期までに死亡していると思われるが、生き延びた人々はケロイドや後障害に苦しんでいた。広島では7年目の白血病、10年目のガンといわれるが、50年代ははじめから原爆症（白血病）が多発した。当時は原因がわからないまま、ブラブラ病、原子病などとよばれることもあった。

白血病が外目にはすぐにはわからないのに対して、ケロイドは人目につく。50年代前半、まず原爆表象になったのはケロイドだった。それを自ら担ったのは「原爆1号」とよばれた吉川清である。彼は被爆で背中を大やけどし、日赤病院に入院していたが、47年、訪問したアメリカのジャーナリストに背中いっぱいケロイドを写真に撮られ、「ATOMIC BOMB VICTIM NO1 KIKKAWA」として、『ライフ』、『タイム』に掲



図4



図5

載された（図5）。そこから「原爆1号」と呼ばれるようになり、被爆者の代表としてしばしばマスコミに取り上げられた。彼自身も、原爆を売物にすると批判を浴びながら、ことあるごとにケロイドの背中をさらして被爆の苦しみを訴えた。当時、広島と長崎の違いとして「怒りの広島・祈りの長崎」といわれたが、吉川は自己主張する被爆者であり、「怒りの広島」の象徴だった。

1952年5月、ケロイドによる新たな原爆表象が登場した。「原爆乙女」である。原爆投下当時、広島の女学生たちは勤労働員で働かされていたが、1、2年生は市内の強制疎開の片付け等に動員されていた。彼女たちは直接熱線を浴び、露出した顔や手足に大やけどを負った。それはやがてケロイドになって少女たちを苦しめた。彼女たちは人目を避けてくらし、わずかに谷本清牧師が主催する流川教会の集まりで同じ仲間と痛みを分かち合ったりしていた。1952年5月、広島で開かれた文藝春秋講演会に参加した作家真杉静枝は、谷本牧師の要請で彼女たちに会い、「そのむごたらしい、原爆火傷のダニは彼女たちの顔にちゃんと吸いついたまま七年間歩いてきている」ことに衝撃を受けた。しかも彼女たちは、いまや「花嫁準備の適齢期に入っているのだ。」（『廣島の少女達』『不死鳥の子』1953年より重引）

ケロイドがあつては結婚に差し支える。東京に招いて東大病院で整形手術を施そう。そう考えた真杉は映画界や文化人に呼びかけ、募金活動を開始する。52年6月9日、9人の被爆女性が上京した。「原爆1号」吉川も同行した。以来マスコミは、顔にケロイドのある未婚女性を「原爆娘」「原爆乙女」と呼び、原爆被害の象徴としてクローズアップする。当初は「原爆娘」も多かったが、53年2月、「原爆乙女」の一人佐古美智子作詞の「ほほえみよかえれ」が「原爆乙女の歌」として発表されてからは「原爆乙女」に統一される。

「冷たきさだめ 身に負うて 寂しく生きる 乙女子の 頬より消えし ほほえみよ
再びいつの 日にかえる」

「娘」より「乙女」の方が＜悲劇＞として消費するにはふさわしい。ポイントは「結



婚」である。当初から新聞は「“原爆娘”一行今朝入京 気にかかる結婚」（『読売新聞』6月9日）、「結婚期を迎えた十人 東大病院で整形手術 顔や手に悪魔の爪痕」（同6月10日）などと、「結婚」をキーワードに報道していた（図6）。「原爆1号」の吉川が「怒りのヒロシマ」の象徴として＜被害者＞を逸脱するのに対し、彼女たちは「女の幸せは結婚」というジェンダー規範の枠内で、＜被害者＞性を表象することになったの

図6

だ。原爆表象は「原爆1号」から「原爆乙女」へシフトしていく。

それには批判も出ている。『毎日新聞』52年8月4日には「原爆娘を宣伝に利用 吉川氏、谷本牧師に抗議」の見出しで吉川清の批判が掲載されているし、広島作家齊木寿夫は『中国新聞』53年8月19日付けに「原爆乙女を解放せよ」を書いて、ケロイドのある若い娘を「原爆乙女」という名でひとくくりにし、原爆被害を訴える手段とすることを批判した。その理由は「乙女はニキビが一つあってもハズカしいのです。(…)顔を、人に見られること自体がハズカしいのです。その乙女の顔に、手に、足に、原爆のひきつれが、ケロイドが、痛ましくもあとをとどめているのです。エハガキのように公衆の面前にひっぱりだされて。彼女たちはどのような気持ちでしょう。」

ケロイドがあっては結婚できないという言説は、それ自体ジュディス・バトラーのいう言語遂行性の実践であり、「女の幸せは結婚」規範を反復強化するものだが、齊木の「乙女はハズカしい」も同様に、ステレオタイプ構築につながるだろう。

55年、谷本牧師とアメリカのジャーナリスト、ノーマン・カズンズの努力により、広島「原爆乙女」たちはアメリカの先進技術によって整形手術を受けることになる。前年54年3月、アメリカの水爆実験により日本のマグロ漁船第5福竜丸が被曝したことから原水爆禁止運動が大きな盛り上がりを見せていたさなかの5月25日、25人の「原爆乙女」が岩国の米軍基地から米軍用機で飛び立っていった(図7)。彼女たちはアメリカではHiroshima Girls、Hiroshima Maidensと呼ばれ、以後日本でも「原爆乙女」といえば、このとき渡米治療を受けた女性たちを指すようになる。



図7

3、ケロイドから白血病へ

25人の「原爆乙女」がアメリカに飛び立った55年、白血病による死者が相次いだ。『中国新聞』2月13日付けは「原爆症また少年奪う」の見出しで高校1年の少年の死を報じ、12月4日付けは「今年15人目の犠牲」として31歳の男性の死を伝えている。東京でも、広島で被爆した成城高校3年の千葉亮が55年5月、白血病で死亡した。彼については、生徒たちが治療費の募金活動をするとともに、活動を広く全国に広げるため、プロの映画人の協力を得て20分のドキュメンタリー映画を製作した。「無限の瞳」である(図8)。映画では、校長から千葉の入院を聞かされた高校生たちが募金活動に立ち上がり、全国に運動を広げていく様子が描かれるが、結局千葉は映画の完成を待たず死亡した。映画

はワルシャワ青年平和友好祭に出品され銀賞を受賞、8月に開かれた第1回原水禁世界大会で三千数百人を前に上映されたという。

しかしこの映画は、2012年9月、「被爆者の声を受けつぐ映画祭」で上映されるまで忘れられていた。千葉亮という名前も人々の記憶に残っていない。それに対して同じ55年、千葉に5ヶ月遅れて同じ白血病で死亡した広島佐々木禎子は集合的記憶となり、いまでも生き続けている。彼女は2歳で被爆、ずっと元気で運動好きの少女だったが、55年2月、白血病を発病。回復を願って病床で千羽鶴を折ったがかなわず、10月死亡した。12歳だった。彼女が鶴を折ったのは、「無限の瞳」をみた愛知県的女子高生が佐々木禎子を励ますために送ったのがきっかけともいわれている。

なぜ千葉亮は忘れられ、佐々木禎子は人々の記憶に生き続けているのか。それには「原爆の子」像の存在が大きい。禎子の死後、級友たちは2度と彼女のような犠牲を出さないために記念の像の建設を思い立ち、募金活動を行った。像は58年5月5日の子供の日、折り鶴を掲げた少女の像として広島平和公園の中に建てられた(図9)。ここにはいまでも全国の子供たちから寄せられた折り鶴がうずたかく積まれている。そこに紡がれる共同性の物語は普遍性を持ち、「サダコ」物語は様々な国で翻訳・刊行されている。

「無限の瞳」と「原爆の子」像はともに級友による募金活動の成果だが、死に終わる暗いドキュメンタリー映画と平和の象徴として造形された少女像では一般の受け止め方はちがう。12歳の少女と18歳の青年というジェンダーの問題もある。まだ性的成熟には遠い12歳の少女は<無垢なる被害者>性を表象するのに最適であり、そして少女が掲げた折り鶴はその被害を空に向かって昇華する。

「原爆乙女」との対比においても、「原爆乙女」がケロイドという黒々とした戦争の傷を突きつけるのに対し、白血病で死んだサダコのイメージは透明で汚れない。それによって戦争被害は昇華され、復興へ向かって先導する。「原爆の子」像がたてられた58年5月



図8



図9

5日、広島市は復興大博覧会でわいていた。4月1日から5月20日までの会期中に会場の原爆資料館を訪れた広島市民は92万という。佐々木禎子の死を契機に原爆表象は原爆乙女からサダコへ、ケロイドから白血病へとシフトしてゆく。



図10

このあと制作された原爆ものの主人公は白血病の少女が定番となる。57年に東映で制作された今井正監督の「純愛物語」はスリのグループにい

た戦災孤児の少年少女の純愛物語だが、中原ひとみ演ずる光子は広島の被爆者で、更正に向かう矢先に白血病を発病し、死んでしまうのだ。その死の床では白くすぎとおった少女の顔に赤い鼻血が線を引く（図10）。59年刊行の白土三平のマンガ『消え行く少女』では、広島で被爆した孤児・雪子が強制連行の朝鮮人に助けられながらも、結局白血病で死んでゆく。「消え行く少女」というタイトルや雪子という主人公の名前は、白血病患者のはかなくも無垢な被害者性を表している。

72年に連載を開始した『はだしのゲン』には白血病死する男性も登場するが、表象における白血病患者はほとんどが女性である。52年、新藤兼人監督による映画「原爆の子」、翌53年の関川秀雄監督「ひろしま」でも同様だった。「原爆の子」では乙羽信子の教え子の少女の一人が白血病だったし、「ひろしま」の高校の教室で白血病で倒れるのは女生徒・みちこだった。実際は『無限の瞳』の千葉亮や『中国新聞』の報道にみられるように、男性の白血病死も相次いでいる。しかし表象、それも大衆的なイメージを喚起するメディアにおいては白血病はつねに女性化されていた。それは60年代以後の原爆作品、井伏鱒二の『黒い雨』やテレビドラマ「夢千代日記」に受け継がれてゆく。

1950年代、原爆表象は「原爆1号」から「原爆乙女」へ、さらに「サダコ」へと女性性をつよめることで、無垢なる被害者性を構築してきたといえるだろう。そのことはかつての戦争における日本の侵略性・加害性への無自覚さ、忘却・隠蔽と無関係ではあるまい。

4. 原水禁運動と原発導入の同時進行

そして50年代半ばから、現実の世界では原水爆禁止運動が大きく盛り上がっていた。その担い手は女性たちである。1954年3月1日、アメリカがビキニ環礁で行った水爆実験により日本のマグロ漁船第5福竜丸が被曝した。それを知った東京の主婦たちは原水禁署名運動に立ち上がり、運動は全国に広がった。さらに54年12月、婦団連会長平塚らいてうが国際民婦連に「原水爆反対日本婦人の訴え」を送ったことから、55年7月、スイスのローザンヌで世界母親大会が開かれることになり、6月、その代表選考をかねて日本母親

大会が開催された。これには全国から2000人の母親が駆けつけ、3日間にわたって開かれたが、戦中戦後の苦労が堰を切ったようにあふれだし、「涙の母親大会」といわれた。ここにも戦争被害の女性化がある。

しかし戦後の民主改革を経た女性たちは、ただ涙に暮れていたわけではない。平和を守るのは母親という認識のもとに、翌56年から母親大会は「生命を生み出す母親は、生命を守り、生命を育てることを願います」をスローガンに掲げ、平和運動の中心となっていく。原水禁署名は55年8月までに、国民の3分の一以上という3200万が集まったが、これには全国地域婦人団体連合会等の女性の力が大きい。広島では集まった100万の署名のうち80万は県婦連の力によるといわれている。

こうした原水禁運動の一方で、原発導入は着々と進行していた。ビキニ事件の前年53年12月、アイゼンハワー米大統領は米ソ冷戦を背景に、西側陣営を固めるため「原子力の平和利用 Atoms for Peace」を打ち出した。いち早く日本で呼応したのが国会議員中曽根康弘であり、読売新聞オーナーの正力松太郎だった。中曽根はビキニ事件の直後、まだ日本では被曝の事実が知られていない3月4日、2億3500万の実験原子炉製造予算案を国会に提出した。そして『読売新聞』3月21日夕刊は1面全紙を使って「急性放射能患者第1号」などとして漁船員の横顔や手足の写真を載せているが、その見出しは「原子力を平和に」である(図11)。記事では、モルモットにされたくないという被害者の声を伝えたあと、次のようにいう。

「しかし、いかに欲しくとも、原子力時代はきている。近所合壁(ママ)みながこれをやるとすれば恐ろしいからと背を向けているわけにはいくまい。克服する道はただ一つ、これと対決することである。／恐ろしいものは用いようで、すばらしいものと同意語になる。その方への道を開いて、我々も原子力時代に踏み出す時が来たのだ。」

ビキニ事件の悲劇はかえって原子力推進の根拠にされている。正力は55年2月に衆議院議員になり、国策として「原子力の平和利用」推進を図る。アメリカからの濃縮ウラン提供は11月に調印され、12月には原子力基本法など原子力三法が成立、56年1月には原子力委員会が設立され、正力が初代委員長になっている。そして57年8月、茨城県東海村の原子力研究所で初の「原子の火」がとまった。



図11

＊おわりに

こうした原水禁運動と原子力発電導入の同時進行を可能にしたのはまずはキャンペーンの力である。被爆国にもかかわらず、ではなく、被爆国として被害を受けたからこそ、その威力を「平和利用」して豊かな生活をといったキャンペーンが『読売新聞』をはじめとしたマスメディアで強力に展開された。しかしそれだけでなく、ジェンダーの問題も関わっているように思える。それをうかがわせるのが『中国新聞』55年7月7日付けの「原爆禁止と平和利用」である。それによれば、7月4日、広島市で開催された原子力平和利用に関する学術講演会に1500余という記録的な聴衆が参加したが、そこには女性の姿はほとんどない。それに対して、昨年来開かれている原水爆禁止集会は女性ばかり。「一口に言って原子力の平和利用は事業であり、原水爆禁止は心情の訴えである」。「心情」だからといって感傷と片付けてはいけない。「でっかい財布を持つ工業界のラッパに押され」ることなく、放射能の危険に対する女性の「心情」に配慮せよ、としている。

「平和利用」という「事業」に突っ走る男たちに釘を刺す内容だが、ともかくここには「平和利用」は男性、原水爆禁止は女性というジェンダー分業がみえる。これは広島だけのことではない。55年5月に読売新聞社主催で、日本工業倶楽部と日比谷公会堂で開催された「原子力平和利用講演会」の写真を見ても、会場いっぱいの聴衆の中に女性の姿は見えない。その一方、女性ばかりの母親大会がほぼ同時期に開かれているのだ。

1955年は高度経済成長の起点とされる時期である。それに伴って、男は外で働き女は家で家事育児というジェンダー分業で成り立つ近代家族が一般化する。男性は「平和利用」という産業化、女性は平和運動という分業はそれと相似形をなす。近代家族のジェンダー分業が産業社会維持に資するのと同様に、「平和」を女性に特化したこの分業は「平和利用」推進を下支えする。

それは戦争被害の女性化と無縁ではない。究極の戦争被害である原爆被害の女性化は「平和」の女性化をもたらす。1960年、広島市婦人会連合会によって、原爆資料館（平和祈念資料館）の前に「嵐の中の母子像」が建てられた（図12）。それは母親大会のスローガン、「生命を生み出す母親は、生命を守り、生命を育てることを願います」の形象化である。

原爆表象をジェンダーの視点でみるとき、「原爆1号」から「原爆乙女」へ、さらに「サダコ」へとく無垢なる被害者＞性を高める中で、戦争を昇華して高度経済成長へ駆け上ってゆく戦後日本が浮かび上がる。それは原発大国への道でもあった。



図12